

水未来会議 2024

トークセッション

トークセッションの狙い

未来を担うユース世代を中心に、
多世代で学び合い、水の未来を
どのように変革していけるのか？

- ① ユースの水への関心やきっかけ（当事者意識）とは？
- ② ユースの活動の強みと到達点、弱みと課題とは？
- ③ ユースを支える多世代の役割とは？

登壇者

ファシリテーター

野田岳仁 (ユース水フォーラム実行委員・法政大学准教授)

パネリスト

水谷優来 氏 (元 UWC Red Cross Nordic校)

柿沼優希 氏 (聖徳学園中学・高等学校)

大塚 敏 氏 (正智深谷高等学校)

コメンテーター

瀬川 奈未 氏 (株式会社日水コン)

小田嶋龍飛 氏 (地球の友と歩む会)

自己紹介

法政大学 現代福祉学部

大学院人間社会研究科

准教授 野田 岳仁（のだ たけひと）

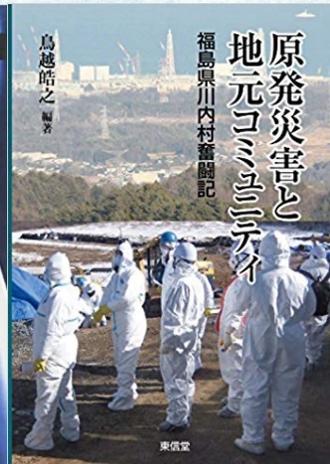
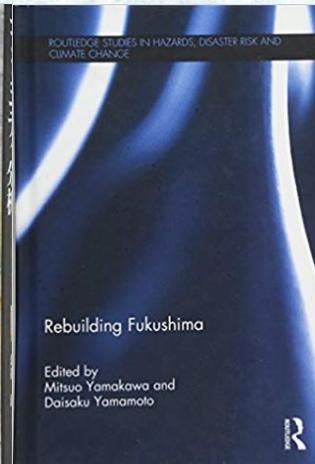
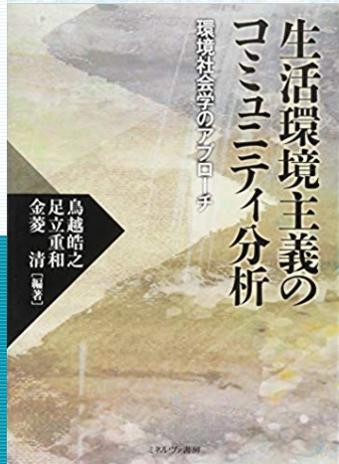
博士（人間科学） 岐阜県関市出身



大学在学中にYouth Water Japanを設立し、代表。2002年に大学を休学し、第3回世界水フォーラム事務局チーフ。オランダ皇太子、エジプト水灌漑大臣など世界のリーダーと50カ国1500人の若者を集めた「ユース世界水フォーラム」の責任者を努め、第6回日本水大賞国際貢献賞受賞。著書に『井戸端からはじまる地域再生』（筑波書房）他。

専門は社会学（環境社会学・地域社会学・観光社会学）

“水とコミュニティ”の社会学を構想



ミツカン水の文化センター機関誌『水の文化』にて連載中



社会起業家としての挫折

ユース世界水フォーラムを開催した後すぐに水のNPOを立ち上げ、愛知万博にて「ユース世界水フォーラム2005」の開催、各地での講演活動、企業の社会貢献活動をサポート、国連や地方自治体への提言等を続けた



週刊ダイヤモンド誌による「日本の社会起業家30人」に選出いただいたことも。しかし、**社会変革への手応えはなかなか得られず・・・**

“生活者の立場”に立つ研究者への転向

“水を守ろう！大切にしよう！”と啓発的なアプローチをしても人びとの行動変革にはなかなか結びつかない・・・という単純な事実

⇒ 市民社会論的な立場からは「日本の市民社会は欧米に比べて成熟していないから、継続することが大事」と助言を受けた
でも、そうではなく、自分のアプローチが間違っていると感じた
人は“理念”だけでは行動を変えられないのでは？という素朴な疑問

そこで、湧き水のある暮らしの現場ではどうなっているのか・・・
琵琶湖湖畔のフィールドへ



現場の人びとが水を大切に**する理由**は、“**水が大切だから**”ではなかった
“**毎日飲む湧き水だから、きれいに管理していないと自分自身が困る**”
“**近所の人たちに迷惑をかけられないから**” 掃除する → 人びとのつながり
“**水を守ろう！**”という理念ではなく、“**生活保全の論理**”でなければ守れない

⇒ 現場の人びとの“**生活の論理**”をふまえた（生活者の立場から）
無理のない**環境保全の解決策**を考えるのが**環境社会学のアプローチ**